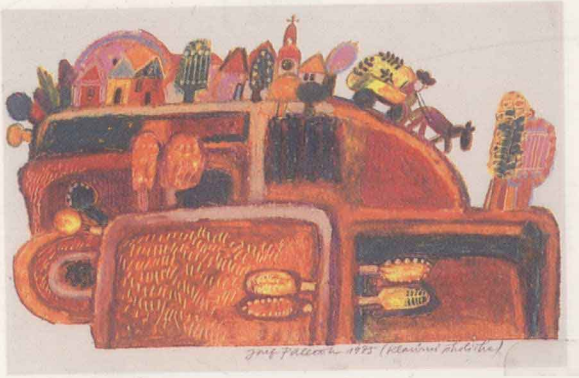
エッセイの小径

# ビールと古本のプラハ

千野栄一



白水 u ブックス

白水Uブックス　1040

ビールと古本のプラハ

著者 © 千野栄一（ちの えいいち）

発行者　藤原一晃

発行所　株式会社白水社
東京都千代田区神田小川町3-24
振替 00190-5-33228　〒101
電話(03)3291-7811(営業部)
(03)3291-7821(編集部)

1997年8月5日印刷
1997年8月20日発行
本文印刷　理想社
表紙印刷　集美堂
製　　本　加瀬製本所
Printed in Japan

ISBN 4-560-07340-6

R 〈日本複写権センター委託出版物〉
本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

900円

エッセイの小径

# ビールと古本のプラハ

江苏工业学院图书馆
藏书章

千野栄一

白水uブックス

# 目次

プラハの江戸っ子屋　5
ビールへのこだわり　18
チャペックとビールのチェコ　32
プラハのコーヒー店　54
激動チェコの出版事情をみる　70
プラハ今昔　81
変貌するプラハ古本屋マップ　97
プラハ古本屋巡り一筆書き　107
チェコ紋章学散策　121
紅葉のプラハ　134
愁いに沈む人間クンデラ　150
プラハで見つけたペンギンの話　163
二つの動物園　175
あとがき　187

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

# プラハの江戸っ子屋

日本でも公開されたチェコ映画『スウィート・スウィート・ヴィレッジ』の中に、トラックの運転手と医者がビールを飲む場面がでてくる。その台詞、

医者「これはうまい。階段の七段目が一番いい温度だって、カレル、どうして気がついたのか、教えてくれないかね」

運転手「長年の経験ですよ。六段目では温かいし、八段目ではもう冷えすぎ」

医者「なるほど」

ここはよほどのビール好きでないと見逃すところである。地下の食料置場への階段のどこへビールを貯蔵しておいたら味がいいかという話なのである。

このエピソードから分かるようにチェコ人のビールへの取り組み方は真剣そのものである。よく東欧などといって十把一からげにするが、ロシアやポーランドにはビールの文化はなく、そこでビールを飲む人には幸いあれと祈る他はない。

既にあまりにも有名になったアネクドートなので、今さら笑う気もしないが、その状況を端的によく伝えたアネクドートに次のようなのがある。

ロシアの醸造所で、やっと会心のビールができたので、チェコに送って試飲してもらうことになった。それに対してチェコは電報を打ち、「キコクノウマハケンコウデス」

そんなわけで、チェコ人はビールの味をとても気にする。日本人が新茶を楽しむように、今はホップが新しいから旨いというようなことをよく言う。ビアホールに通う人の中には体

温計のようなビールのための温度計をもち歩いている人がいて、泡の粒が大きすぎたり、泡がなくなっていると、ビールの中にこの温度計を入れ、「このビールなあに？」と、つきかえしてしまう。しかし、チェコ中のすべてのビアホールがそうであるというわけにはいかない。

もう二〇数年も前のことになるが、当時プラハにただ一軒あった中華料理店で食事をしていたとき、丸い大きなテーブルで隣に腰をかけていた日本人がぶつぶつ文句を言っているのを耳にした。あまりに聞き苦しいので、直接にきいてみると、その人は日本のビール会社のO氏で、チェコのビールが旨いというので視察にきたのであった。「これじゃあ、日本のビールの方がいいですよ」と、O氏はいった。たまたまその中華レストランで飲んでいたのはスタロプラメンという、チェコでは特に有名という銘柄ではなかった。

「本当に旨いビールをお飲みになりたいですか？」

「ええ」

「それじゃあご案内しましょう。ところで地元の人だけがひそかに通う小さな目立たない店と、古くからの有名な修道院の跡で、外国人がよく行く珍しいビアホールがありますが、どちらにしますか？」

もし後者と言ったら、地図を丁寧に書いて失礼しようと思ったが、その人は憤然としてか、当然というか、「前者だ」と、答えた。前者へは一人でやるわけにはいかない。まず旧市内の一画にあって、場所が分かりづらいし、場所が分かってもビアホールらしく見えないし、何よりも一見の客はなかなか座れないからである。

このビアホールを私はひそかに「江戸っ子屋」と、名付けていた。ここに飲みにくる人は地元の人だけで、他所者がいないからである。観光客や外国人はあまり歓迎されなかった。静かにあるいは陽気に、顔見知りだけが飲む所だからである。そんなわけで、空いている席があっても、必ずしもそこに座っていいというわけではなかった。それにいくつかのテーブルはシュタムガスト（常連）の席に決まっていて空いていても座らせてもらえなかったし、

それを無視して座ってもビールが運ばれてくることがなかった。私が常連になったのは、留学以来何年も通ったからである。入口を入ると、旅行者であることが一見明白なO氏を見て、カウンターのマスターが言った。

「おやおや今日はお供つきかい？」

「いやあね、この人は日本でビールを造っているのだが、チェコのビールは大したことがないと言ったのでね……」

「そう、それじゃ、注意して注がなくちゃ」

地元のいわゆるビール通にきくと、ビールが旨いかどうかは、取り扱いだけでもいくつかの条件に依っているそうである。その一つは樽を置く地下室の温度で、これが六度で一年中安定しているのがいいビアホールだという。温度が低すぎれば泡が消え、高ければ泡が大粒になって絹漉の泡といかなくなる（日本では樽と蛇口の間に冷凍機を入れてあるらしい）。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

次に樽から蛇口までのパイプをいかによく洗うかで、これが汚いとビールが苦くなる。また、新しく樽から出てきた最初の二〇杯はおしげもなく捨てる。日本のように最初ボトボト出てきた泡を何回もジョッキにいれかえて出すなんてことは全く考えられない。そして最後が注ぎ方で、一気にサアーッとジョッキを回しながら注ぐ。

一気にサアーッと注がれたビールの泡は見事であった。普通はカウンターの所では飲ませないのだが、ビールの関係者と言ったので立ったままのO氏にジョッキが差し出された。O氏はそのまま一気に一杯のジョッキを飲み干すと、「もう一杯」と、所望した。

「こいつ飲み方知ってるぞ……」

このあとの説明はいらないであろう。「よかった。ここへ連れてきてもらって。誤ったレポートを書くところでしたよ」こう言われて私がチェコのビールの責任者ででもあるかのよ

うに嬉しかった。このビアホールはU zlatého tygra（ウ・ズラテーホ・ティグラ）「黄金の虎」という名で、フス通りにある。入る前に注意すれば壁に黄金とはいえないが白っぽいレリーフの虎がいる。午後の三時頃開くのでその前に行って並ぶつもりなら誰でも入れる。ただ座る席は店の人にきいた方がいい。

私は飛行場に着いてタクシーに乗ると、いつも運転手さんに、「今一番旨いビールを飲ませるところは？」と、きくことにしている。「ウ・ティグラ、ウ・コツォウラ、それに××××だな」というのが一番普通の返事である。「ウ・ティグラ」は「江戸っ子屋」、「ウ・コツォウラ」は川向こうの小地区にある小さい店で、猫のひたいほどしかないというわけではないが「雄猫」ビール店である。そして、三番目として、それぞれの運転手さんが自分の贔屓の店の名を言う。この中にも「白鳥」とか「二匹の猫」とか、「鹿」とか、いい店はまだまだあるが、「黄金の虎」にはおよばない。

さてこの「虎」で顔になると、シュタムガストのテーブルにも空いているときは座らせてもらえるようになる。そして、何曜日はどのテーブルは誰の席か分かるようになる。気がつ

いてみると火曜日の奥の席は大学関係者が多く、私もそこに座るようになった。この席で習ったことといったら、大学以上といっても過言ではない。新刊書はその日のうちに書評つきで内容が分かるし、来週出る本は検閲にひっかかって発行部数が少ないから行列に並んでも買えとか、党の中央委員会の票数まで分かる。またそこには反体制の人も、詩人、芸術家、作家、画家などみんな集まってくる。日本に行ったオーケストラ、クワルテット、人形劇のメンバーやら、反体制の作家フラバル、画家のヤーグルなどみんなここのメンバーなのである。

数年前のことだが、あるテレビ局から電話がかかってきた。チェコに取材に行ってきたので見ていただきたいという。局に行ってみると、撮影したビデオのカセットが本を立てるように並べて二メートルはあるという大変な量である。話をきいてみると、だいたいもう選び出してあって、筋はできあがっている（多くの場合、日本を出発する前から、「社会主義の優等生チェコスロヴァキア」とか「ペレストロイカに戸惑うチェコ」と、取材のテーマは決まっていて、それに合わせてとってくるものである）。

「すみませんが、選んだフィルムで話されていることが分からないものですから、その内容を教えてください」、「勝手にペラペラ話していますが、お分かりですか」というのがあいさつであった。

なるほど、工場の場面では自動車の部品のXYがどこの工場から納入が遅れたので、とか、ロック・コンサートで絶叫している文句とか、分かり難い部分があったのは確かである。テレビ局の人はこちらの知識をかなり疑っているようであった。

取材した中に「黄金の虎」という一巻があったので、これだけはこちらから頼んで見せてもらった。「どうしてここを取材したのですか?」、「向こうのテレビ局の人にビアホールをと頼んだたら、ここに連れていってくれたのです」

この答えには驚いてしまった。向こうのテレビ局の人は何も知らない新人か、とてつもなく頭のいい奴に違いない。世が世なら、こんな反体制のインテリが集まるビアホールなど断然撮影禁止のはずである。簡単にペレストロイカがここまで進んだと考えるには、私はあまりにも多くのことを知っていた。むしろ、あとで上司に、「なに『黄金の虎』へ連れていっ

ただと?」と言われて叱責される担当者の身の上を心配したくらいである。

「この、本をかざしている人は有名な作家だと言っていました」というその作家は、誰あろう当代第一の反体制の人気作家フラバルで、この日出版された自分の本を振って見せていたのである。

ほんの数分のカットであったが、私にはこれは木曜日の客筋だということが分かった。

「これを撮ったのは木曜日ですね?」

「そんなこと覚えていませんよ」

「でも撮影日誌があるでしょう?」

くいさがる私にディレクターは日誌を見に人を走らせた。「はい、木曜日です」という返事が戻ってくるのに、そう時間はかからなかった。

「どうして、木曜日だと分かるのです？」
「いや、座っている人を見るとね」
「その作家は木曜日に来るのですか？」
「いや、彼は火曜か木曜に来るのですが、他の人との組み合わせで……」

このあとの仕事はスムーズに運んだ。でもディレクターは依然として腑に落ちないようであった。

「最近プラハに行ったのはいつですか？」
「二年前です」
「二年前の人が今も来ているとは（思えませんね）……」

よほど疑い深い人であるのだろう。私には細かく説明する気は失せていた。二年であろう



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo